

疾病や障害をもつ人たちが、医療技術、保険医療制度など様々なアプローチによって「自立」を獲得することは、リハビリテーションのめざす最大の目的であることはいうまでもない。本特集における「自立支援」とは、国際生活機能分類（ICF）における「生活機能」に関わる要因のうち、特に「活動」と「参加」についての支援とし、その現状と課題、展望について解説していただいた。

■頸髄損傷と自立支援（浜岡憲二論文）

頸髄損傷者への自立支援では、対象者のそれぞれの目標に対して、個人因子や社会因子を踏まえながら、心身機能と身体構造、活動と参加に対して各職種でアプローチを行う。これらは、各施設で様々な方法で実践されている。本稿では、筆者が所属する吉備高原医療リハビリテーションセンターにおける頸髄損傷者への自立支援の取り組みを、作業療法士の立場で事例を紹介しながら述べる。

■障害者通所施設と自立支援（隆島研吾，他論文）

在宅をベースに生活する場合、社会参加へのステップおよび社会参加の場として、障害者通所施設役割は極めて大きい。リハビリテーションプランの中ではツールのひとつでもある。現在、リハビリテーションの視点からは介護保険制度や自立支援制度、医療制度、各種自治体独自の制度などを組み合わせる必要があるため、これらに精通した効果的なマネジメントを行う役割を担う人材育成が重要であり、また課題でもある。

■難病と自立支援（渡邊宏樹，他論文）

本稿では、自立の概念を（1）身体的自立、（2）経済的自立、（3）精神的自立の3つに分類し、それぞれの視点から、難病についての自立支援を考える。今回は、多くの疾患が含まれるいわゆる「難病」のうち、「難病の中の難病」と呼ばれる筋萎縮性側索硬化症に焦点を当てて論じた。随意運動がほとんど奪われた人工呼吸器装着後の長い人生を考えた時、精神的自立への支援が最も大きな課題となることが浮き彫りとなった。

■高次脳機能障害と自立支援（渡邊 修論文）

高次脳機能障害者への自立支援では、基本的な日常生活は自立しやすい若年層に対しては社会参加の機会向上、脳血管障害が原疾患となりやすい中高年層に対しては、身体障害へのアプローチを含めた日常生活の自立が主な目的となる場合が多い。本稿では、高次脳機能障害の中でも頻度の高い行動の感情の障害、注意障害、記憶障害に対する支援内容を述べ、さらに社会資源（障害者自立支援法、地域保健・福祉機関、就労支援機関）による高次脳機能障害者支援について触れた。

■障害者の自立支援の現状と課題—リハビリテーションの視点から（石渡博幸論文）

現在行われている障害者福祉制度改革は単なる障害者自立支援法の改正にはとどまらず、自立支援法に変わる新たな法制度の整備や障害者の権利条約批准を見据え、障害者基本法の見直しや差別禁止法などの多岐の分野にわたる総合的な改革が、法的位置づけをもつ当事者を主体とした検討会議の場で議論されている。

■とびらページの作品について：作者紹介(p1)———牧野文幸氏（口と足で描く芸術家協会）

- ・1966年、富山県生まれ。
 - ・高校2年生の夏、水泳の練習中に頭を強打して頸椎を損傷した。以来、首から下全身が麻痺している。15か月を病院で過ごした後、車いすで高校に復帰し、見事に卒業した。
 - ・高校卒業後、口で絵を描き始めた。職業画家のもとで毎日長時間の修練を重ね、4か月で描けるようになった。個展の開催もあり、グループ展にも多数出展している。1996年には、倉敷市文化振興財団に作品を寄贈した。
 - ・絵画をはじめ様々なことに興味を持ち、挑戦している。特に書道に対して情熱を傾け、2001年4月日本習字教育財団・成人部（漢字部）に入会。以後、同年11月に初等師範、2002年5月中等師範、8月高等師範、2003年4月正師範、2004年1月に教授免許（五段）を取得した。
- （口と足で描く芸術家協会ウェブサイトより、一部改変）
- * 今月号の作品では、今年の干支である「鬼」のイメージを表した。
作者のご厚意により、抽選でこちらの作品を差し上げます。ご希望の方は、巻末のアンケートはがきにその旨を記載の上、編集室までお送り下さい。